

# 甲田

# 甲田

# 裾

KŌDA NO SUSO

増床への懸念  
高橋由太郎

—第24巻—(3月号)

—4月号—

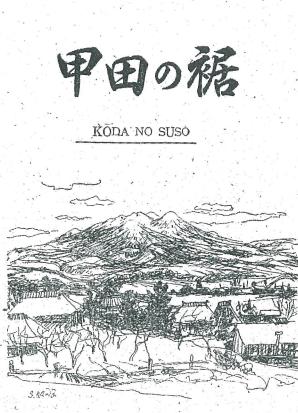
—8月号—



5月



—5月号—  
第一回  
第十一号  
松丘保養園



—十一十二月號—

# 甲田の裾

KŌDA NO SUSO

昭和  
五十年  
八月  
二十日  
創刊

—4月号—(2015年)  
第一回  
第1号

4号

通卷687号

# 甲田の裾

KŌDA NO SUSO

昭和  
五十年  
八月  
二十日  
創刊

—4月号—(2015年)  
第一回  
第5号

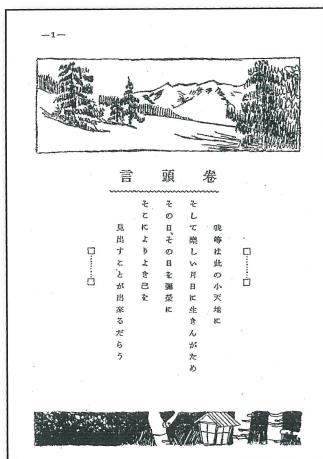


甲田の裾創刊85周年

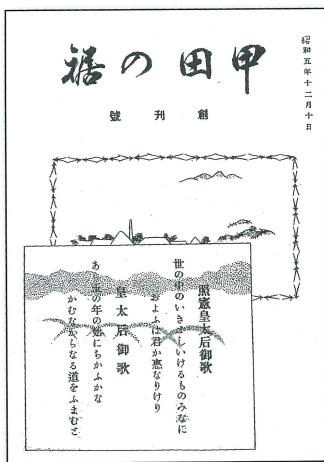
—第23巻— 第8・9月號

# 甲田の裾 創刊85周年

創刊号 卷頭言



甲田の裾創刊号 表紙



昭和5年12月に八甲田山麓の裾野の地で「甲田の裾」は誕生しました。  
以来85年の長きに亘り、療養者の慰安とハンセン病の啓発のため、園と社会  
を結ぶ役割を担ってきました。

## 表紙について



『甲田の裾』創刊85周年を記念して、昭和25年から31年までの趣きのある表紙絵を集めてみました。戦後より、写真に代わり、絵が表紙に登場することが多くなりました。松丘周辺が描かれたものもあり、遠くに八甲田山系を臨む作品もあります。先人が「甲田の裾」と名付けたように、常に八甲田山に見守られているという思いがあったのかも知れません。

---

## 甲田の裾 平成27年4号 通巻687号 目次

---

「甲田の裾」公刊85周年を迎えて …… 名誉園長 福西 征子	… 2
隨想 一木一草あれやこれや(7) —『甲田の裾』発刊85周年に寄せて—	滝田 十和男 … 10
学びつつあれば …… 東京女子大学前学長 真田 雅子	… 18
静岡県立大学短期大学部 20年の空白	社会福祉学科准教授 立花 明彦 … 21
松丘盲人会のあゆみ(1) ~盲人会発足62周年を迎えて~ ……………松丘保養園盲人会	神戸 文子 倉内 真紀 … 24
「初めまして」	治療棟看護師長 上野 恵美 … 28
短歌 白樺短歌会	…………… 30
日本国内療養所医療従事者 フィリピン ハンセン病研修に参加して (後編) ……………看護師 横内 里美	… 32
「どうぞよろしくお願ひします」。人事異動	…………… 37
書籍紹介・編集後記	甲田の裾編集委員 … 39
自治会日誌	…………… 41
※比良信治 「野の花の微笑み」は今号はお休みです。	
写真提供 : 福祉室	

「甲田の裾」バックナンバー(平成24年1号～)は  
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ  
<http://www.hosp.go.jp/~matuoka/>

# 「甲田の裾」公刊八十五周年を迎えて



松丘保養園名譽園長 福 西 征 子

## 一 戰前の「甲田の裾」と中條資俊先生

「甲田の裾」が公刊されて八十五周年を迎えるといふので、今年の第三号に目を通したところ、昭和五年十二月十日創刊、通巻六百八十六号とありました。

一口に八十五周年と言いますが、間に休刊を余儀なくされた困難な時代を挟んで、一つの医療施設の機関誌として昭和の初めから平成の現在まで公刊が続いたことは、それだけでも目出度いことです。

しかし単純にそう言つてしまうと、今は故人となられた人々も含めた「甲田の裾」同人から、「目出度いどころではない」とお叱りを受けることは必至でしょう。

の昭和五年は、らい患者一齊調査で患者総数一万四千二百六十一名が記録され、内務省がらい根絶二十年計画、三十年計画、五十年計画を策定し、更に、我が国で初めての国立療養所として長島愛生園が設立され、日本ハンセン病学会誌の前身である「レプラ」誌もこの年に創刊されています。

また、満州事変が勃発した翌昭和六年には、ハンセン病患者の強制隔離を法制化した法律五十六号・旧らない予防法が公布されています。

「甲田の裾」は、「貞明皇后さまの御仁慈」を記念して「患者慰安」のために創刊されたといわれますが、保養園の機関誌として、前述した旧らい予防法公布に関する広報をはじめ、開戦前後の昭和十五、六年頃に今更いつまでもありませんが、「甲田の裾」創刊年

なると、当時広く推進されていた「無らい県運動」に寄与するための記事が掲載されるなど、それぞれ時代の波を被つてきました。ぼんやりしていると見過ぎてしまいがちですが、かつては、「甲田の裾」の誌面を以て現在とは正反対の啓発活動が行われていたのです。

保養園の初代園長の中條資俊先生の有名な論文である「癩は遺伝の仮面を被る慢性伝染病」は、昭和九年の「甲田の裾」第四、五月号に掲載されています。その論のなかに、先生はハンセン病は遺伝病ではなく慢性伝染病であると断言しつつも、「・・されば、苗代の種子抜きこそ癩予防上火急の重要な事とすべきである。それは家族の癩者を隔離することに他ならぬい・・・」と述べています。所謂「苗代論」ですが、この記述は先生の意図がどうであつたにしろ、強制隔離政策や無らい県運動の推進に大きく寄与したと思われます。

その一方で、中條先生の「素因論」は、「・・癩はその感受性ある人と患者との感染によつて伝染が起こること。・・特に幼若期が素因度が高いと見るべきこ

と・・・」というものであり、遺伝的素因よりは、むしろ個人の成長の過程における抵抗力や免疫力の完成度を重視しています。幼若期はそれらが未完成なために（ハンセン病に）感染しやすいという考案は、現在の私たちの考え方とそう違いません。

四十年代の終わりに保養園に赴任して、「癩は遺伝の仮面を被る慢性伝染病」を初めて読んで、その科学的でヒューマニズムに溢れた論旨の展開に目を見張つたものでした。しかし、それから三十年後、ふたたび先生の論文に目を通して思うことは、「書いたものは、必ず後世の批判を覚悟しておかなければならぬ」ということでした。

中條先生は、強制隔離政策の推進に批判的であつたようで、光田健輔先生とは距離を置いていたと言われています。その理由として、孤島や僻地ではなく、患者家族が住む地域近くに療養所を設置すべきであるなど、中條先生が光田先生より、よりノルウェイ方式に近い考え方を貫いたことが考えられています。その面影が見え隠れしている昭和十一年五月号の「東北地方に国立療養所の設置を希望す」を仔細に読むと、終戦

間近の頃、患者家族の要望に応えて、収容していた患者を帰宅させたという逸話が残っている中條先生らしい内容が随所に見られます。

それでも松丘保養園始まつて以来、中條先生を超える論客はおりません。書き残された論文に目を通すと、その時代を生き抜かなければならなかつた先生の苦闘が目に染みるように痛々しく、人としても医師としても中庸を保ちながら、極寒の保養園を守り抜かれたその御生涯に深い敬意を覚えます。

しかしながら当時（過去）と現在は、時代が違ひ、人が違ひ、法律が違ひ、さらに、往事の医学的水準が貧しかつたとはいえ、現代の視点から見て、批判すべき論点は、その論点の根拠を明らかにしておくべきで、今一度、中條先生の遺稿を読み直し、勉強させて頂こうと思っています。

他方、保養園の短歌同人は白樺短歌会に結集して旺盛な作歌活動を行つていきましたが、歌集白樺の第一集の公刊が昭和三十二年でしたから、菊池恵楓園や多磨の白樺短歌会同人であつた根岸章さんや滝田十和男さんは今も健在で、「甲田の据」の歌壇を引き継がれています。手元に白樺短歌会第一集があつたので、以下に幾つかを抜粋してみました。

## 二 保養園の柳壇と歌壇など

保養園の戦前戦後の文芸として最も盛んに行われたのは川柳であつたと言われています。俳句や短歌のように季語も要らず、五七五の十七文字でその時々に感

いさかひて夫去りし後の寂寥よ鉢の金魚に物云ひて見しが

夫の心傷めしままに暮れてゆく軒のツララの太るを  
見てし

靴下をはみ出し光るトタンの義足にこだはり土工等の  
傍らを通る

青山歌子

新鶴生雄  
あらたにいくを

病友は悔ひをり

血の痰を喀きて臥す夜におろおろと吾をめぐりて妻は  
ゐるなり

「それならば君がやつてみろ」と言ふ役員のたくまし  
き健康にしばし黙せり

生島 明

村々を雇はれ歩く母につきて巡礼の如く吾はめぐりし  
この森に登りて見れば故里方の岩木山見ゆ浮き立つ

が如

世の事で何を知るかと言はる幼くて病ひに罹れば知る  
ことのなし

麻野登美也

故里に帰る奇蹟を思はねど春の汽笛は病床にひびく  
井戸端にポンプを上げるらい児らの笑ひは何ぞ炎天に  
ひびく

浅瀬石研

飯椀はここと友に教へられつつがなく盲の我は生き  
つぐ

大橋玉泉

浴場に吾を連れ行く友のさす傘にかすかな今朝の雨あ  
し

わが視力ほどこす術のなしと説く医師の事務的なた  
よりなき語よ

マレーよりスマトラまでの戦ひに死なざりしことを

小山蛙村

顔も手も花粉にまみれ林檎の交配に励みし少年の日の  
記憶あり

抑留者を裝ひて世間をせまく生くるかたるの吾に兄は

うそぶく

送り來し家族の写真畳を臥す吾にささやく如く笑みか

く

苅田省三

田原 浩

癒ゆる日の奇蹟のあるを希はむに古き療友が否定し止まぬ

会ひたしと書きたる字句の重複を意識して故郷への綴りは終る

憤の湧く

義足もてスコップを踏む術に慣れ庭を耕す陽炎のなかに

福地幸健

佐藤一祥

小さき子はこの寒き日にも櫂引きて遊び呆けつつ親を尋ねず

父母の中に座りて書を読みし貧しき吾家のかみの日こ

して

つ

空襲に盲友を次つぎ背負ひては壕へ伴ふ吾は猛りつ

ひし

谷川静夫

松永不二子

行楽の浜にて二首

水垢の青き渚辺闊歩しつつ薬臭満てる院に帰りたくな

し

はばむ物片寄せ進路展きくる漁師は吾等の素性知らぬらし

「人間復帰」のプラカード押して行くデモ隊の吾に公憤の湧く  
云ひ出せば争ひとなる雑居にかかわりもなき猫を愛撫す

- 6 -

友等みな眠りに入りし夜遅く手紙書くべく灯りを低く  
下ぐ

野の雪は堅雪となれり田作りの老ひし父はも肥運ぶら  
む

#### 陸奥保介

吾が里も税に苦しき故ならむ伐られしままに赤き山肌  
視力弱き妻が探りて手折り來し落に混ざれり雑草の茎

#### 矢島 忠

白髪を後ろで束ねた杉野先生の彫りの深い顔、矢島さんや天地さんの氣恥ずかしそうな物腰、そして成田小五郎先生の超然としたお姿などは、今も私の記憶のなかに生きていて、思いがけない時に不意に蘇り、皆さんと共に、松丘の日向の草むらのなかで話をしているような錯覚を覚えることがあります。

矢島忠さんが、「歌を詠む時、病気や後遺症のことから逃げられないのがハンセン病文学の限界なんでしょうね」、と言つていたことも昨日のことのように思い出します。

これらの歌人の内、平成八年に松永不二子さんが歌集「出会い」を、平成二年に矢島忠さんが歌集「鳥海」を、平成十二年に天地聖一さんが詩歌集「満ち潮」を公刊されました。また、近年の白樺歌壇を牽引される傍ら、「甲田の裾」の歌壇の選者をつとめておられた成田小五郎先生は「道端の草」「素描」「分身」等を次々と世に出されました。私が保養園に赴任した頃はお元気に活躍しておられたこれらの方々も、段々に亡くなられて寂しくなりました。しかし、高野さんの丸い笑顔、松永さんの品の良い落ち着いた声、

数年前に亡くなられた野中武祉さんは、「甲田の

「甲田の裾」に「谷間の母様リー女史伝」を連載され、平成十八年に一冊の本に纏められて出版されました。この本は、今も世間に広く読まれていると聞いています。人と交わることが苦手な人でしたが、しかし人嫌いでなく、むしろ、人なつこい寂しがり屋であつたように記憶しています。

### 三 予防法闘争と「甲田の裾」

他の療養所の機関誌がそうであつたように、戦後の「甲田の裾」の論壇は、「予防法闘争」に関する議論がすべてでした。特に、昭和二十八年に法律一百四号・新らい予防法公布後は、どんな沈黙、どんなに些細で他愛のない話であつても、その底には「予防法」の姿が見え隠れしていました。まして、「甲田の裾」に載せるような文章は、すべてそうでした。

ハンセン病療養所に住む者、社会復帰した者、そしてまた、その家族、関係者にとって、予防法改正・廃止が終生の悲願であつたことは確かなことです。その緊張は、平成八年の予防法廃止、そして、平成十三年の「らい予防法国賠訴訟事件」の熊本地裁判決以後も

絶えることなく続きました。その昔、「患者慰安」のために創刊された「甲田の裾」は、入所者だけでなく、さまざまな人々の論を掲載し、それぞれの時代の予防法闘争の姿を映す保養園の機関誌になつていました。

補償法が制定されて少し気が緩んだ頃、その頃の入所者自治会長だった伊藤文男さんが、「もう甲田の裾の果たす役目は終わつたのではないか」と言い出したことがあります。それに対して、「予防法がなくなり、国賠訴訟が勝訴したからといって、甲田の裾が存在する意味がなくなつたと思うのは早計だ。これから鎧を脱いだ裸の運動、保養園に住む人たちの市民運動を展開しなければならない時代が来るのだ。これから甲田の裾の新しい役目が始まるのだ」「是非とも甲田の裾を存続させなければならない」という反論がありました。その結果、現在まで「甲田の裾」の公刊が続いているのですが、実際、「甲田の裾」は、その後のハンセン病を巡る慌ただしい動向を入所者や地域の人々に報せる広報の役目を果たし、また、新しい啓発活動の道案内も担つてきました。

古い話ばかり持ち出してしまいましたが、最新号の「甲田の裾」第三号の記事は、どれもすばらしい内容でした。今風の感性に基づいた落ち着きのある内容で、更に、今は故人となられた宮本良子さん由来の鷺草（さぎそう）の花の表紙に懐かしい思い出を誘われました。江谷勉副園長先生の「納涼祭りもノーマライゼーション」も、近頃の保養園のありさまが良く述べられていて興味深く拝読させて頂きました。

私が保養園に赴任した当時の夏祭りは、ネジリ鉢巻きにハッピ姿の人々が櫓の上で叩く津軽太鼓に合わせて、夕暮れから夜九時頃まで、入所者の皆さんと職員とお客様とが円陣を作つて盆踊りを踊つたものでした。来園していた市の職員が、「今はどこにも見られなくなつた津軽の盆踊りが松丘に残つてたんですね」と語つていましたが、平成二十年を過ぎた頃から入所者の高齢化につれて太鼓を叩く人がなくなり、盆踊りは中止になつてしましました。残念なことでした。太鼓を叩く夏祭りはこれが最後という時の佐藤智恵蔵さんの勇姿は今も忘れていません。

ハンセン病が治癒する時代になつて以降、新発症者がないため、療養所は年々寂しくなる一方で、「甲田の裾」の発刊も難しくなつていると聞いています。しかし、どんな形であれ、過去と現在をつないで対峙させ、保養園のその時々の姿を世間にアピールして来た「甲田の裾」の刊行を続けて頂きたいと思います。

新しい時代は、過去を見据えながら築いて行つこそ、より良いものになると信じています。

最後に、原稿を集め、印刷所との仲介をし、校正をし、また、方々に冊子を発送して下さつて現編集員の皆さんに心から感謝申しあげます。また原稿をお寄せ下さつておられる皆さま、どうか今後とも宜しく御願い申し上げます。

平成二十七年十二月五日

# 一木一草あれやこれや(7)

—『甲田の裾』発刊八十五周年に寄せて—

滝 田 十和男

われらの松丘保養園の機関誌『甲田の裾』誌が、昭和五年十二月に創刊されてより、早くも八十五周年を迎えたことに、心からのお祝いを申し上げたい。

『甲田の裾』は、いくたびもの度重なる国家的困難な時代にもめげず、その連綿たる歴史の櫻を、絶ゆることなく受け渡しされて、今日の創刊八十五周年の日を迎えることが出来たのも、時代時代にその刊行・編集に携わつて支えてきた関係者の皆様が、真摯な努力を払われた賜物と、そのご労苦に対しても深く敬意の念を捧げるものである。

いま青森県内で、このような同類の雑誌刊行が、『甲田の裾』誌ほどの長い命脈を保つてゐる雑誌は、他にあまり聴くことはない処をみると、あらた

めて我等の『甲田の裾』の存在感が浮き彫りにされてくるのを感じるのである。

『甲田の裾』はその創刊当時からの役割として、「大風子」以外の「治らい薬」が無いために、療養所に収容されながら、たいていの人は病勢を募らせてゆくのが普通だつたから、その絶望感を少しでも和らげるものとして精神面から救済するため、施設側は宗教の力に頼つて仏教の僧侶を招いての説法講話会を開いていたが、これは強制的なもので、患者はその都度、礼拝堂にかり集められていたというが、患者たちはそれに反感する者が多く、あまり成績が挙がらなかつたという。

そうした時の雑誌の発行は、文芸作品その他の作品の発表の場として提供して、一般社会への病氣に

対するアピールよりも、主に入園患者の精神緩和剤のようないくつかの使命が課されていた事は言うまでもないものだつた。

『甲田の裾』の発刊は昭和五年だが、その誕生についてには『甲田の裾』の昭和七年頃の何月号かに（今私の手元には持ち合わせがないので断言できないが）小野みつるさんが短いエッセーを寄せてゐるが、その中で小野さんは、大正時代から他の療養所の有志の手で、贋写刷りの回覧誌のようなものが松丘にも回つてきて、川柳・俳句・短歌などの短文芸だけだが、お互に見せ合つたり、点数を競い合つたりしていたという。その頃はまだ国立の療養所は開設されておらず、みな公立で熊本の九州療養所（いまの菊池恵楓園）、香川県の大島療養所（大島青松園）、大阪の外島保養院（今の邑久光明園）、東京の全生病院（今の多磨全生園）などとの友院の患者同志が、五つの療養所の間を、手作りの冊子を回送していた時期があつたといふ。

松丘ではそのころ川柳の結社「北柳吟社」の設立に動いていた。当時の患者総務の二田貞治氏が、川柳を作っている人たちを自室に集めて「川柳の結社

を作ろうじゃないか」と提案したのだと言う。

そのとき入院して間もなくだつた千葉ナツヨさん（今でも現存している）が、その集まりのお茶汲みの手伝いを頼まれて、「一座の人々にお茶を注いで回ったのよ」と、今年九十七歳のご高齢ながら当時の事を懐かしく語つて、貴重な証言をしてくれている。

実は、その年に贋写刷りながら松丘でも自分たちで雑誌を作ろうと努力していて、原稿もほぼ揃えたところに、貞明皇太后さまからの御下賜金を頂いた。それを記念して贋写版刷りの予定を急遽変更、今に残る活版刷りの『甲田の裾』が初めて世に出たと聴いている。松丘の文化風土とでも言うべきか、何処よりも川柳を作る人がダントツに多かつたがために、『甲田の裾』の毎号のスペースの三分の二ほども、川柳欄で占められ、あたかも川柳雑誌かと思われる状況が、戦前戦後を通じて長く続いたのも否めない事実だが、そうかと言つて『甲田の裾』は厳然として今尚生き続けていることは、いささかでも文芸に親しむ生活を享受してきた老生にとつては代え難い存在なのである。

同じ年に結成され、あれほど隆盛を極めた川柳の

「北柳吟社」も、今年は『甲田の裾』と共に八十五周年を祝うべきなのに、今から十年以上も前に会員の死去が相次ぎ、結社そのものが消滅してしまったことは寂しい限りだが、私個人としては川柳から出発したもの、間もなく短歌に開眼して、『甲田の裾』によつて育まれ、そして共に歩き続けた私的人来说は、この小さな出版物の恩恵をもろに被つてきたという深い思いがある。

私と『甲田の裾』の出会いは、たしか昭和十三年の秋に松岡小学校で、短い作文を書かされたのが、『甲田の裾』に掲載された。自分が書いた物が活字になるなんて、生まれて初めての事だつたから、嬉しさと面映ゆさで緊張した事を覚えている。

それから昭和十五年の春に松岡小学校（当時そういう呼称だつた）を卒業して、大人の部屋に移つたその先が、小山勲平（ペンネーム冷月）さんが室長を勤める和風寮五号室であつた。小山冷月さんは、「北柳吟社」の幹事長をしている他に、『甲田の裾』の編集を任せられ、自室で独りでやつていたから、私がその部屋に転室して間もなくから、私に原稿用紙の書き方を教えて、原稿の清書を手伝わせるようになつた。冷月さんはその頃腕の神経に苦しんでいた

せいか、その頃届けられる原稿は、大抵口一ル半紙に書かれたものが多く、それを原稿用紙の枠目に書き写す作業はなかなか進まない事が多かつた。それで若い私に目を付けて、原稿の書き写しは何時の間にか私に任せきりのようになつてしまつた。私も難解な分からぬ字があると、国語辞典を引いたり、冷月さんに聞いたりして、大変勉強にもなつた。

そこで自然と川柳の作り方を覚えたりして、自分の清書した原稿が活字となつて『甲田の裾』が印刷屋から届けられると、その真新しいインクの匂いが、何とも言えない新鮮なものに感じたものだつた。

昼の間は重病棟の看護作業に出されていたので、編集の手伝いは、たいてい夜遅くまで掛かつたものだが、それさえ苦にはならなかつた。私もその頃は若かつた所為もある。

それに初めて「北柳吟社」の句会に参加した時の事を、今でも忘れられないのだが、戸井田吉之助さんが室長をしている鳳鳴寮三号室を会場とする川柳句会は中々盛会で、三十畳敷きの部屋一杯になるほどで、四十名くらい集まつていたと思う。

前もつて出される宿題と、その場で出される席題とともに、自分が一番良いと思う句に投票する互選の方式だつたが、その句会に初めて参加したに拘わらず、新参者の私の提出した句が宿題、席題ともに最高点を取つてしまつたではないか。これには皆驚きの声を挙げた。自分の愛弟子が最高点を取つた事に、気分を良くしたのか冷月さんは、さつそく私に「志翠」という川柳の雅号を付けてくれ、北柳吟社の正会員にも推举して呉れた。

これが、のちのち私の文芸に人生をかけて嵌りこむ原点となつたものである。

日支事変がアジア大陸に戦火を拡大してゆくにつれ、『甲田の裾』も一般の出版物同様に、警察の検閲も厳しさを増して、短文芸の一字一句の表現にも監視の目を光らせ、あれこれ文句を付けてくるようになつた。

あるとき「白樺短歌会」の雑詠欄に投稿した、加藤某の作品に、

一清純な乙女子ひとり入院す

この娘もやがて朱に混わるか—

か」が赤化思想すなわち（その頃は社会主義イコール共産党を意味するのが（赤）だつた）から、その作品を赤ペンで消して返して寄越した。  
それに嘙みついたのが、小山冷月さんの前に『甲田の裾』の編集を長く勤めた富檉鬼外さんである。富檉さんは自治会の理事であり、また書記も勤めていて、毎日患者事務所に出勤していた。  
外部と繋がる電話機があるのは患者事務所だけである。富檉さんは青森警察署長に直接電話を掛けて抗議し、取り消しを求めた。  
警察署長は最初威猛高に、「決めた事は決めた事だ。変更は出来ない」と取り合わなかつたが、富檉さんの三十分にも亘る長電話を、しかも一日に三度も掛けての抗議に、一時は危うく『甲田の裾』の発刊禁止まで行つたが、最後には署長の方が折れて、発刊禁止の難だけは免れたのであつた、と言う。  
この富檉さんと『甲田の裾』の関係についても、少しばかり触れておく必要があると思うが、富檉さんは発病する前の若い頃、東京で印刷会社に勤めていた経験もあり、雑誌の編集には打つてつけの人だつたらしく、創刊当時は職員の手で編集されてい

たが、いくらもしないうちに患者側に委譲され、富檉さんが適役として選ばれたのだと言う。私の入院する以前の事だが、青森県出身の児山某という常軌を逸した暴れ者がいて、毎日のように誰彼なしに喧嘩を吹っ掛けたり、院外に出ては物を盗んできたり、またキリスト信者を目の敵にして、聖書を炉端で読んでいるのを見ると、背後から襲いかかり足蹴にして、聖書を火の中に投げ込むと言つた乱暴を重ねていたと言う。

その事を暗に戒める小文を『甲田の裾』に載せたところ、それを読んだ児山は激昂して、薪割り鉢を振りかざして富檉さんの部屋に押し掛け、「この野郎！」殺してやる」と襲いかかつて来て、富檉さんを追い回したと言う。

富檉さんは命の危険を感じて必死に逃げ回り、丘の上の西南の境界線の土堤を越えた所に、縦三間×横五間くらいの茅葺きのスキー小屋が建っていた。（この小屋は当時の中條院長が民間の土地を借り上げて、冬場の間だけ職員たちとスキー遊びをするときの休憩所のために建てたもので、夏場は無人の建物であつた）

かり足蹴にして、聖書を火の中に投げ込むと言つた乱暴を重ねていたと言う。

そのことが院内では大問題化し、普段院内をわがもの顔に慣れ回っていた児山も、早速追放処分となつて姿を消してしまつた。

生命の危険に晒されながらも、編集者として尽力された時代に統き、災難は幾度も繰り返された。

昭和十一年の松丘の大火灾は、すべての物を灰燼に帰す大惨事であつた。

その中で火災直前『甲田の裾』を印刷するために（当時の「日本救らい協会」より寄贈と聞いているが）据え付けられたばかりの輪転機を患者たちは猛火をかいくぐり必死に運び出したと言う。

しかし本体の輪転機は搬出したものの、附属の鉛板などのパーツを全部消失してしまい、使用不可能

富檉さんはそこに逃げ込み、建物の隅に大きなドラム缶が一つ伏せてあつたので、その中に隠れて息を潜めていた。すると児山某はドラム缶を鉢で二、三度叩いたけれど、まさかその中に人が隠れているとは気付かず、「あの野郎、何処へ行きやがつたんだ」と、ぶつぶつ言いながら戸外へ出て行つたといふ。富檉さんは危機一髪のところで、難を逃れたのであつた。

のまま、のちのち木工場の隅にシートを被せられて保存され、一度も輪転機を動かすことなく、昭和二十二年に「東奥印刷」に引き取られてゆくのを、私も見送った一人であるが、もし火災が無かつたら自分達の手で活字を組み『甲田の裾』を印刷して世に送り出していたかも知れない。

『甲田の裾』が創刊以来の通しナンバーで、今に保存されているのは、昭和十一年の大火灾の際に全部焼失してしまい、一冊も残つていなかつたのを、当時川柳欄の選者をしていた東京の「川柳きやり」誌の主宰者・村田周魚先生が、一号も欠けることなく保存して置いたものを、北柳吟社に提供してくれたが故に、いま図書館の貴重な蔵書として残されているのである。

ちなみに戦争が厳しくなると、物資の不足を来て、印刷用紙の配給など望みべくもなくなり、『甲田の裾』もついに休刊の止むなきに至るのであるが、小山冷月さんは空襲警報が出されると、その都度リュックの中に『甲田の裾』の合本を詰め、防空壕に避難するのであつた。

さいわいな事に青森空襲の際にも、焼夷弾の直撃

を受ける事はなかつたが、自分の私物よりも優先して、『甲田の裾』を護つてくれたことは確かである。戦後『甲田の裾』が、桜井方策園長の肝煎りで復刊されて、最初の二回はごく小さくて、新書版くらい十二ページそこそこの物であつたが、我々の喜びは大きなものであつた。

昭和二十七年には、小山さんが一人でやりこなしていた編集の仕事を、初めて職場の体制が執られて、当時空き室になつていた七草寮の一室に『甲田の裾編集局』の看板を掛け、経験者の小山さんを局長に頂き、菊池盈と私が編集員、事務員が根岸章、小山八千代の両名の五人の陣容で発足したのであつた。「らい予防法」の改正運動が全国的な広がりを見せ、北の療養所も自意識の高まりに沸いたのであつた。

ほどなくして自治会執行部の改選があり、私も自治会執行部入りし文化部長などになつたものだから、編集局から脱げざるを得なくなつたのであるが、小山冷月さんの辞した後は、根岸章君・天地聖一君と続いた編集局長の座は、いずれもそれぞれの特色のある編集ぶりを發揮して『甲田の裾』を護つてくれたと思う。天地君などは在席二十年も続いた

まま世を去つた。彼の死後の後任者が見つからず、ついに四肢が麻痺に侵された不自由者の私に、その跡目のバトンが回されたのであつた。

私の編集局長は七十五歳、八十二歳までの七年間であつたが、とても充実した七年間だつたと思う。

私もつて入園者での編集業務は終わりを告げ、職員の手に渡されて九年になるが、それまでの蔭の功

労者として事務的な業務に精通して、各年代の局長を支えられた茅部ゆきを氏と、そのあとを継いだ高橋正巳氏の功績は、『甲田の裾』を語る上で、決して忘れて欲しくない存在だ。

私の最後の七年間を曲がりなりにも勤め終わらせたのも、高橋君の優れた事務処理の敏腕に助けられたが故の七年間であつたと思う。

直接入園者の手による編集の終焉を迎えたのは、丁度創刊七十周年を迎えた記念すべき節目の年であり、感慨も深いものがあるのであるが、その状況を東北一円をカバーする新聞「河北新報」が写真入りで詳しく記事してくれたのは、平成十八年十一月十九日号の紙面であつた。

あれからも発行は続けられ、職員の手で編集され

るようになるのであるが、さいわいに係として採用された人の斬新な感覚が、そのまま誌面に表れて、活字も拡大され、とても読みやすいスタイルの本になつたことは、幾らかは編集の経験を重ねてきた私に言わせて貰えば、園内人口も減るばかりの中で、これだけ充実感のある誌面づくりに驚いている。というのが私の偽らない気持ちだ。

私はすでに二年も前に卒寿を越すまでに、命を守られてきた病骨の身だけれど、過ぎ来し方を辿るままに思いを馳せれば、幼少の時代から今日まで、すなわち私の療養所ぐらしに関わるすべてに、悲しい時も苦しい時も、『甲田の裾』は暖かい風を送り続けてくれた父親のような存在だ。まことに有り難いことである。

最近はまた『甲田の裾』にまつわる事で、とても嬉しいニュースを聞いた。それは前稿の『イケメン藤川光男狂想曲』の中でも、一寸だけ登場して貰つた熊谷久一さんが、創刊当時は「北島青葉」の筆名で書いた文章や、昭和十四年に宮城県の東北新生園へ移られて以来、三十数年振りで松丘に帰つて来てからの小説や随筆など、全盲の身でありながら、文

才の赴くままに『甲田の裾』に作品を寄稿し続けたものを、近く一冊の本として纏められ出版されると言うのだ。

熊谷久一さんは、少年時代の私の恩師の一人でもあるのだが、昭和五十八年に松丘で亡くなられるが、熊谷さんの甥・姪に当たる即ち熊谷さんの妹の息子さん、娘さんが揃つて松丘を訪ねて来たのだ。その事情というのが、誠に奇縁に満ちている。甥御さんが、母方の戸籍謄本を調べているうち、熊谷久一という叔父さんの名を初めて発見して、その叔父さんの移籍先が松丘保養園の所在地である、青森県東津軽郡新城村大字石江字平山十九番地である処から、当園を尋ね当てて来たという次第で、私も熊谷さんの眠る「月見野靈園」に案内したりしたが、ご遺族がたは熊谷さんに関わる『甲田の裾』の記録を眼にする事によつて、改めて叔父熊谷久一さんの歩いた人生を知る事が出来た。そして、札幌の理解のある後援者らの手で『甲田の裾』の分身とも言うべき、「熊谷久一作品集」が世に出るのだ。これだけでも『甲田の裾』が嘗々として歩み続けてきた八十五年の意義は、満たされて余りあるようだ。 (了)



昭和40年頃の『甲田の裾』編集室

# 学びつつあれば

東京女子大学前学長 眞田 雅子

私の松丘保養園との出会いは、一九七五年、好善社

主催の社会人キリスト者ワークキャンプに参加した夏に与えられました。その前の年に、京都ノートルダム

女子大学で同じ研究室を分かち合っていた楠木先生が、菊池恵風園でのワークに参加され、それに刺激を受けた結果です。それまで私は、ハンセン病そのものについても、それに対する日本の施策についても、無知の状態でしたから、療養者の方々と親しくさせていただ

ことになります。

保養園の魅力の虜になつた私は、その年のクリスマスを、どうしても松丘でお祝いしたいと望み、同じキャンパーであつた青森在住の木村幸子さんに、厚かましくも、宿泊の希望を申し出ました。木村さんの松丘に対する深い思いと広い心が、私の我儘を叶え、しかも今日までの四十年にわたる友情を育んで下さつていることは、感謝しきれない恵みです。

残念ながら西村さんは、間もなく帰天されました。当時カトリック教会の責任者であつた佐藤ナサさんご夫妻と、滝田十和男さんご夫妻が、園の外れに位置している甲田寮にお住まいで、私の不躾な訪問を、いつも温かく迎えて下さいました。当時は、「日本海」というブルートレインがあり、夜京都でこれに乗ると、朝松丘保養園への導入は、専ら西村さんがして下さつた

には青森に着くという便利な訪問でした。私の訪問の頻度はだんだん増え、夏休み、冬休みは、たいてい松丘にお邪魔するようになりました。十和男さんは、律儀に、訪問の数を書いて迎えて下さいました。

訪問し始めたころは、日曜のミサは聖堂いっぱいの出席者で、クリスマスや、例えば佐藤忠作さん（ナサ

さんの御夫君）の洗礼式などの折には、信徒会館に御馳走の山が用意され、次々とカラオケが披露され、私

も「津軽海峡冬景色」を覚えて歌つたことも懐かしい思い出です。当時は、滝田知子さんがオルガンを弾き、司祭以外は、園外の方がお出でになることは稀でした。カトリック教会は、園の近くの小さな篠田教会の主任司祭が見えていたようですが、私の眼には、どうして篠田教会が必要なのか、皆が松丘に集まれば、二度もミサをしなくて済むのにと不思議に思われました。らい予防法が廃止される以前のことです。

一九九二年から、私の仕事が京都から東京に変わり、すっかり松丘訪問の機会が減りました。代わりに、多磨全生園の渡辺たつ子さんとのお交わりを頂くようになり、彼女が「津田せつ子」のペンネームで『多磨』誌に発表されたエッセイや短歌を二冊の本の形に纏め

られ、二冊目を編集するお手伝いをさせていただきました。その二冊目の題が、『病みつつあれば』というのですが、津田さんによれば、これは「結核を病み、若くして逝った明治の歌人長塚節の歌『すこやかにありける人は心強し病みつつあれば我は泣きけり』」から採つたということです。

その題にヒントを得て、私は本稿の題をつけさせていただきました。

一昨年退職の時を迎えた私は、再び松丘が恋しくなりました。かつて親しくさせていただいた方々は、ほとんどの天に帰られ、卒寿を祝われんとする滝田さんが、カトリック教会を、切り盛りしておられました。沢山の信者の方々が正座しておられた畳は取り払われ、代わりに置かれた長椅子に、わずかな入園者の方と、本町教会等から来られた信者の方たちが、朗読その他の奉仕をなさるために座つておられました。篠田教会はもう無くなつたと聞きました。園内の他のキリスト教会でも、礼拝に来られる方の数は激減し、様々な問題があるように伺いました。

昨年ねぶたの時期に訪問させていただいた私は、生憎の悪天候で、びしょぬれになり、持病の気管支喘息

になつてしまつたのですが、川西園長先生のご厚意で、入室を許され、看護師の皆様にゆきとどいたお世話を頂き、元気に帰京することが出来ました。らい予防法廃止以来、療養所は社会に開かれたものとして、様々な試みがなされていると聞いておりますが、私自身が、まさにその恩恵を受けた者となりました。

宗教というのは、多様性が豊かさをもたらす一方で、現代社会においては、それが恐怖をあおり、世界に不安をもたらす要因にもなっています。私の信ずるキリスト教も歴史の中で分裂を繰り返し、憎しみの根源となつてしまつた事実がありますが、一方で、その分裂を一致へと導きまことの平和を作り出そうという動きも出てきています。今年は、一月十八日から二十五日までが、「キリスト教一致祈祷週間」として、全国で、様々な催しが行われましたが、松丘保養園の三教会が、互いに助け合つて、園外の信徒の方々と共に祈りの時を日常的に持つことで、キリスト教一致の具体例を園外に発信することになる日を夢見ております。



ダンプで整地にはげむキャンパー達の様子（昭和53年頃）

# 二十年の空白

静岡県立大学短期大学部  
社会福祉学科准教授

立花明彦たちばなあけひこ

人は、大なり小なり悔いをもちながら人生の旅路を歩んでいくようになります。もつとも、それは自己に対する単なる弁解かもしませんが、私にとつての悔いの一つは「二十年の空白」であり、それは私の人生の中で大きな損失であるように思えてなりません。

私がハンセン病療養所の存在を知ったのは、三十年余り前の大学生のときでした。視覚に障害をもつ私は、通常の読み書きでは点字を用いていたことから、大学での学びでは、語学や専門科目のテキスト等を複数の学生ボランティアグループに点訳依頼していました。その中に奈良女子大学の点訳サークルがありました。彼女たちは毎年、夏休みに泊りがけで大島青松園や長島愛生園等の盲人会を訪問し、会員の方々と交流して

いて、その様子を聞くことになります。それは、私が「ハンセン病」を初めて耳にしたときでもあります。が、当時の私は、そのことを聞いても特に関心を示すことなく、二十年の時が流れてしまいます。改めてハンセン病問題に関心をもち、本格的に学び始めるようになるのは、二〇〇一年からのことです。そのきっかけは、この年の五月にハンセン病国倍訴訟の判決があつたことと、前月に私が専任の大学教員として現在の大学に赴任したことにあります。

大学で担当している科目の一つ「障害者福祉論」では、障害者福祉の理念・原則を講義しますが、このとき、障害者の人権保障と相反する思想、施策である優生思想や社会防衛思想にも触れます。社会防衛思想とは、多数の人々の福祉のために、一部の人々の人権

が侵害されても止むを得ないとするものであり、日本のハンセン病政策はその思想に基づいて進められたたるもので、これを取り上げないわけにはいきません。講義で触れる以上は、教員としてそのことを充分に理解しておかねばならず、必然的にハンセン病問題について調べるようになりました。

ハンセン病問題への知識が増していくにつれ、自身の中には、この大きな人権侵害の歴史に無関心であつた後悔の念、なぜ大学生のときに学ぼうとしなかつたのかと、二十年の空白を悔いる思いがふつふつと沸き起つてくるようになります。そのことから、ゼミのテーマを「歴史の検証——日本のハンセン病政策を考え」と改めました。それは、今を生きる者としてハンセン病問題について私ができることは、歴史の過ちを次世代に伝えていくことと、私と同様の悔いを学生には体験させないようにすることであると考えるからに他なりません。

私が学生を連れて、あるいは単独で療養所、およびそこにある盲人会をお訪ねするようになったのは二〇〇六年からであり、まだ十年にも足りません。ハンセン病は後遺症として視覚障害をもたらします。そ

れのために、療養所には視覚に障害のある方々が一定数暮らしていて、同じ障害をもつ者同士の親睦と生活の向上を目指して盲人会を立ち上げます。盲人会は、全国十三の療養所全てに存在しますが、戦前に発足をみた大島青松園盲人会と栗生楽泉園盲人会を除く十一園での結成は戦後で、特に九園は一九五一年から一九五五年の五年間に集中しています。松丘保養園に盲人会が発足したのは一九五三年ですが、この年には駿河療養所、邑久光明園にも同様に会が生まれました。これらの盲人会は一九五五年五月、米国の統治下にあつた沖縄県の二施設を除く十一団体が結集し、全国ハンセン病盲人連合協議会（全盲連）を結成し、療養環境の改善を目指して厚生省陳情を行なうに至ります。視覚障害をもつ私としては、ハンセン病問題の中ではあまり表に現れない療養所での盲人の方々が体験されてきた事柄、生活実態とその質の向上を目指した各種活動を詳らかにし、世に示したいと考えており、会員の方々との面談や会活動を記録した資料の閲覧を続けています。

一九五三年十月に発足をみた松丘盲人会は、最初に点字習得のための点字部と、寮友への奉仕活動とし

てのマッサージ部を立ち上げ、行動を始めます。これらは、他園の盲人会の活動と共に通しております、そこには、人としての基本的な欲求、すなわち知識を得るために手段の獲得と、人として役立つ存在がありました。一九五六年には機関誌「点字松丘」を創刊し、年三回の発行を始め、さらに一九五七年には、福祉部と福祉部を立ち上げ、会員の福祉の増進に向けた活動を進めていきます。また奉仕活動としてのマッサージ部は一九五八年、園内に按摩療法所を開設しますが、これは他園には例を見ない取り組みであり注目されます。

こうした一連の活動がどのようなきっかけで始まったのか、またその方法や内容、それらによつてもたらされたものを全体的なハンセン病問題の流れを踏まえつつ考察したいと考えています。その結果については、改めてこの紙面等でご紹介できればと願つているところです。

初めて松丘盲人会をお訪ねしたのは二〇一一年九月でした。このとき、当時の会長・福浦さんは入室されていて、お会いすることができませんでしたが、会で大切に保存されている大方の資料を把握できまし

た。以来、毎年、松丘の盲人会をお訪ねする機会に恵まれています。ただ会発足から六十年余りが経過した今、療養所の入所者は減少の一途を辿るようになつて久しい状況です。実際、松丘盲人会の二〇一五年十二月時点での会員数は十五名で、盲人会の方々への聞き取りと会の歩みの整理とまとめの作業は、ますます急がねばならない状況に迫られていると言えます。一方で、会員の訃報に接するたびに、二十年の空白への悔いが蘇ります。この原稿を書きながらも、新たな悔いを生まないようにならねばと自身を戒めるばかりです。

# 松丘盲人会のあゆみ(1)

～盲人会発足六十二周年を迎えて～

松丘保養園盲人会 神戸文紀子

昭和二十八年十月二十八日、「松丘盲人会」の前身である「杖の友会」が結成されました。平成二十七年十二月現在「盲人会」の会員数は十五名、平均年齢は九十歳と超高齢化を迎え、活発な会活動はできなくなりました。が、創立六十二周年という歴史を誇る会であります。

そこで、盲人会に保管されている貴重な史料と当時を知る入所者の方々からご協力を賜り「松丘盲人会」が結成された理由や背景、どのような組織であつたのかを詳らかにし皆さんに伝えていくこと、そしてその作業を通して盲人の人々の思いを感じていくことが、私達職員のこれから課題と捉えます。まだ始まつたばかりですが少しまとめたものを、ここに紹介します。

(保管史料より引用)

このように、なんら楽しみもなく、ただ寝て起きて食べるといった日常の中で、盲人の心の内は卑屈感を抱き、その境遇を嘆き悲しみながら明け暮れていた。そして、娯楽に乏しい盲人達は春の雪どけをまつて、雨天以外は散歩かたがた公園の日溜まりに集まり、屈託のない四方山話に花を咲かせ、時には不満をぶちまけ合うのをせめてもの慰めとしていた。それが年々数

を増やして、一つの常会めいたものとなり、社会や政

杖の友会結成に向けて

『遠く世の中から隔てられて、時には病友からさえ疎

治を論じ合うに至つて「山の国会」という異名で呼ばれるまでになつた。

そうした中で自分たち盲人の地位の向上は、盲人自らが一致団結奮起する以外にないという結論に達し、山の国会の常連であつた十六名が発起人となり、初代会長に落合幸雄氏が推され「杖の友会」結成となる。

結成にあたり、会員名簿の作成や記録といった責務を引き受けてくれた二名の晴眼者に「杖の友会」の書記、世話係として引き続き協力を依頼し、手探りではあるが活動の一歩を踏み出すこととなつた。

しかし、当時は盲人等の活動を理解してくれる人が少なく、会への風当たりが大変厳しかつた。会の運営も事ある毎に暗礁に乗り上げ「盲人等に何ができる」と冷笑されながらも風当たりが強ければ強いほど、会員の結束は固く結ばれていつた。結成時は六十一名だつた会員数は、翌一十九年には九十八名に増え、まづ取り組んだのが点字とマッサージ（按摩）の習得であつた。

## 点字に見出した生活の喜び

・・・舌やくちびるで読む聖書・・・

昭和二十九年五月、栗生楽泉園から点字の聖書が送

られて來た。そして「こちらでは点字を練習しているがなかなかの好成績だ。ひとつ松丘でもやつてみないか」という便りが添えてあつた。「点字が読めたらどんなに生活が楽しいだろう」と長い間ものを読む機会から閉ざされていた数名の人たちが集つた。「苦労も多いだろうが、とにかくやってみようじゃないか」ということになつた。



「点字松丘」発行を喜ぶ会員たち

自治会文化部に「点字講師の招聘」を要請し、青森

市内でマッサージ業をやっている石塚金次郎先生に教  
えて頂くことになった。毎週火曜日に二時間習いおよ

そ三ヶ月で修了した。その後は、事務分館（現福祉  
室）勤務の西田稔氏が東京で点字の講習を受けて教え  
るなどした。受講者は会員に限らず、園内放送を通じ  
て募集したところ、相愛会の晴眼者を含め二十人ほど  
であつたが最後まで講習会に出席し点字をマスターし  
たのは盲人会関係の人達ばかりであつた。

中には指の感覚を失つてしまつている人もいる。そ  
の人たちは舌や唇をもつて触れるのである。点字本は  
紙だからベトベトとなる。そんなことから園長にお願  
いして何枚かの使い古したレントゲン写真をもらい点  
字を刻んで用いるようになつた。悪戦苦闘の連続で  
あつた。十分位やると、頭がジーンとしびれて何がな  
んだかわからなくなつてくる。後ろへひっくり返つ  
て、暫くしてまたやつた。冬はことに大変だつた。寒  
さと病気で指先では思うようにわからない。中途で何  
度もやめようかという話も出た。また舌でやつてている  
うちに舌がざらつき飯が食えなくなつたといふことも  
あつた。悪戦苦闘の末、まず五十音がどうやら覚えら  
れるようになつた。舌や唇でやる人も要領がよくなり

ツバで紙がべとつくということがなくなつた。

（甲田の裾 昭和三十年六月号より一部引用）

まさしく血のにじむ努力で点字を習得した盲人たち  
は、外部の人と文通を交わしたり、点字本や聖書を読  
めるようになり、生活に大きな喜びをもてるようにな  
つた。次の句はその頃に詠まれたものである。

『舌読みは不潔ならんと云われつつ 我には外にすべ  
もなかりき』

『舌で読む点字へ滲む血の匂い』

落合 幸雄

田畠 夏泉（田畠 繁）  
田畠氏はこの句について、次のように書き残してい  
る。

「舌で読んでいる人がいると聞き、暗記してあつた聖  
句を点字で打つてもらい読んでみることにした。最初  
はよだれを多く出すと点字がつぶれ、加減すると舌が  
擦れて血がにじみ出る状態を繰り返した。このように  
して三ヶ月目に単行本を読めるようになつた私は、山  
頂を征服したような末路の地を開拓するような希望を  
もつて手当たり次第読破した。」

（点字松丘 第二十八号より）

## 短歌からみえる盲人の思い

松丘盲人会初代会長の落合氏も、点字を習得した一人である。

点字を舌先で読める様になつた昭和二十九年頃から歌作りに興味を持ち、次のような短歌を遺している。

盲友の志村満氏（赤石氏）は次のように振り返る。

『会持つを 盲しひら等と あなづらんし こともな

つかし 四年経にけり』

これは彼の最初の作品である。（盲のくせに生意気な何が出来るものか、今にきっと潰れて終うさ）と冷笑され、会の活動を阻害する者さえあつたのに屈する事なく会員数は増え、団結力も強まり療友の理解も深まり、社会からの強力な援助と激励も与えられ会が軌道に乗ってきた三十二年に発会当時の苦労をしみじみと述懐した歌である。

『中風にて もつれし舌の 感覚を 点字に触れて  
繰り返し読む』

祖先の感覚がないので、彼は先ず唇から舌先を使つて非常な苦心と努力の結果、唾で紙面を濡らす事も少なくすらすらと点字を読める様になつた。そして、暇さえあれば点字文や点字書に舌を走らせていたが三十四年の夏、友園に返送する録音テープに挨拶を吹

き込んでいるうちに舌がもつれだし、遂に入室し、暫く養生のやむなきに至つた。幸いに血圧が下がり出しだけで、健康の快復度を確かめようと再び舌読を始めたが、どうも以前の様にはすらすら読めないもどかしさを感じた事であろう。

『刑務所で 点訳せしてふ 少年の 風が舌読の 我に立つなり』

函館少年刑務所に服役中の少年達が心を籠めて点訳した本が瞳会のクリスマスプレゼントと一緒に寄贈された。感激しながら舌読している彼の盲いた瞼の裏に少年達の顔や姿が鮮やかに浮かんだのである。然もこの歌は、療養の時間の短歌に見事入選した秀作である。

『床柱 互いに探り 合う声よ 頤ひ久しう なりし  
会館』

三十四年の暮れ待望久しかつた盲人会館が日本M.T.Lの寄贈によつて落成した。便利な場所を選び自分達の希望も設計に入れてもらつた二十三坪の立派な建物を隅々まで探り歩いて喜び合つた我々の仲で大工の経験を持ち、会の柱石として会館建設に苦心された事だけにその感慨は一人であつたに相違ない。



## 「はじめまして」

治療棟 看護師長 上野恵美

この度、一〇月一日付をもちまして独立行政法人国立病院機構弘前病院より異動で参りました治療棟看護師長の上野恵美と申します。新任ゆえ、ご迷惑をおかけすると想います  
がよろしくお願ひ致します。

看護学校時代を含めると三〇年間通い続けた弘前病院とは反対方向へ通い始め、ひと月が経ちました。新天地ということもあり、不安だらけでした。しかし、コーヒー喫茶にて、おいしい手料理を持ち寄った女性陣との楽しいひと時、昔話をしていく中、時折少年の顔を見せる男性陣、治療棟を訪れる入所者の皆様の笑顔に支えられ、楽しく過ごしております。

さて、松丘保養園の印象ですが、入所者さんの平均年齢が八十四歳と聞き、きっと静かに毎日を過ごしているのだと思つておりました。しかしそれぞれのライフワークともいうべき趣味や生きがいを持つておられ、様々な行事などに参加され、お互いを助け合い、想像より活動的な毎日を送つていらっしやることに驚きと、襟を正さねばという思いにさせられました。

私事、もうすでに計算にたけている方には年齢がお分かりかと思いますが、丙午の女で

す。火災を招く、夫の命を縮めるなど迷信がありますが、何とか結婚もでき、夫も健在です。のらりくらりの大学2年の息子と、高校2年の娘がいます。背が高いことで驚かれた方もいらっしゃると思いますが、家族の中では私が一番小さいのです。子は鎌とも言いますが、今や子は喧嘩のもと、飼っている犬が我が家の大鎌です。

私はこれから松丘保養園の歴史と、辛い時代を生き抜いた皆様から学ぶことがたくさんあります。また、それを風化させず、伝えていく役割もあると思います。まずは、自分の生き方を見つけられずにいる我が家の息子たちに生の教科書として伝えていこうと思う今日この頃です。そして、治療棟の看護師長として、避けることのできない入所者の皆様の高齢化に対し、できるだけそれの思いに寄り添い、いつまでもお元気で、心豊かに生活ができますよう、治療棟一丸となつて支えてまいりたいと思つております。

# 短歌

## 白樺短歌会

北の空指すプロペラ機

滝田十和男

正座して玉音放送聴きましし病友らもすべて今は世に無し

戦後はや七十年の節目にも遇はで逝きたり病友の多くは  
茫々としたる記憶に殊のほか暑かりし終戦の日の蟬の声

氣折れして何も手付かぬ終戦のあと惨禍も忘れ難かり

国会の安保審議の結末を気がかりとして夜を深めたり

戦争を知らぬ世代の議員らは憲法九条の重さ知らざらむ  
混乱の果てに可決となるものに予想されしとテレビは伝ふ  
戦前も戦後もとみに貧しかり戦禍の傷の癒さるるなく

戦争の過酷な日日を嘗めきたる身に乞ひ願ふ平和つづけと

平穏な世を永らひて迎へたる卒寿の命いとおしくおれ

自らの力のみにより生き來たる日の一日もありやこの身は  
かさねたるわが年齢をお互いに語りあふ友の少なくなりぬ  
わが住める庭の端なる一角に浜昼顔の花なだれ咲く

ヒマワリの習性真似て咲くものか浜昼顔の陽に揃い向く  
恒例となりしネブタの夜祭りに招かれて発つ車椅子群

招かれてネブタ祭りを真近くも桟敷に觀るは老いし賜物

ひと夏の思いを込めて練り歩くネブタゆらゆら別れ難しも

北の空指すプロペラ機の傍近くスチュワーデスと写真撮らるる

ブローチが似合いますねとスチュワーデスのご愛想うけてタラツプ登る  
海峡を北に飛びつつ綿雲のひろがりつづく遙か眼下に

厚雲の下は程なく函館を通過しますとアナウンスの声

## 日本国内療養所医療従事者

### フィリピン ハンセン病研修に参加して（後編）

看護師 横内里美

研修五日目は、予定されていた施設が旧正月休暇のため見学できず、研修の合間束の間の観光が出来ました。といつても観光先もハンセン病由来地やフィリピンの独立運動貢献者の像・ユネスコ世界遺産などです。マニラ市内の高山右近像を見学しました。

高山右近大名はハンセン病に関するフィリピンと日本の関係で外せない人物です。戦国時代～江戸時代のキリシタン大名で、豊臣秀吉によつて発令された「バテレン追放令」にも棄教することなく、徳川家康に国外追放され、フィリピンへ渡りました。その際多くのハンセン病患者を引き連れたそうです。フィリピンでは日本国内での宣教活動で有名であり歓迎されました。

翌年長期の船旅疲れからか病氣になり、享年六十四歳で他界されました。



高山右近像

研修七日目は帰国日のため、本格的な研修最終日六日目です。

④ 亦セ・レイエス記念医療センター  
フィリピンで最も古い歴史を持つハンセン病療養所として開設されました。現在ではその他のハンセン病療養

所と同様に総合病院としての機能を兼ね備えています。またハンセン病患者・医師・看護師やハンセン病患者のアフターケアに関する医療従事者などで構成された「ハンセンズ・クラブ」の運営を行っています。ハンセン病患者をサポートし、偏見を減らし、公衆衛生問題としてのハンセン病制圧、社会の認識や患者同士の仲間意識を促進し、患者が社会の一員として独立できるよう力づけることを使命と捉えていました。定期的にミーティング、ヒーリングセミナー、パーティ等が行われています。また職業訓練も行つており、イベントを行うことでスポンサーの確保につなげています。

ハンセンズ・クラブとの懇親会が行われ、十数七十歳代までハンセン病患者・回復者が在籍し、今回の訪問時には約六十名のメンバーが集合していました。小学校から英語教育があるフィリピンですが患者の八割は英語が話すことができませんでした。一時間以上かけて通院する患者も珍しくなく、通院が困難で治療を中断した人も見受けられました。彼らは皮膚症状を隠すために、半袖でも汗ばむほどの陽気であるのに長袖を着ている人が目立ちました。病気のために仕事を解雇されるなど経済的な困窮を強いられており、今回の会でした。

研修の中で最も偏見や差別に苦しむ人々の姿を目の当たりにしました。MDTは無償提供されるものの、その他のビタミン剤などの薬剤費、リハビリーション、通院するための交通費など患者負担は大きく、このような患者・回復者の悩みを共有する場としてハンセンズ・クラブ

は非常に重要な役割を担っていると考えられました。



ハンセンズ・クラブとの懇談会

双方英語が話せないため、センター職員が通訳してくれるのでですが、当方の質問内容を患者・回復者本人に聞いてほしいのに、センター職員が代弁してしまうことが多い、残念でした。軽食とともに茶話会を行いました。当園の入所者と同様に、ハンセン病と知つてい

ても一緒に飲食を共にしてくれることに幸せを感じてくれるようで、研修参加者がたまたまカバンに入つていた「柿の種」を差し上げたところ、日本人に友人がいるという回復者が「美味しい＝マサーラ」と教えてくれ、自身もおもてなしで出された軽食を「マサーラ」と言いながら食しました。その回復者に「どうして日本ではハンセン病患者がいなくなつたんだ？」と聞かれ、色々と思うところはあります、「フィリピンにもいなくなりますよ」と返答しました。お別れの際、私が差し出した手に少しふっかりした顔で握手をしてくれました。

## ⑤ WHO西太平洋事務局

今回の研修最後の訪問先です。WHO（世界保健機関）は、「全ての人々が可能な最高の健康水準に到達すること」を目的として設立された国連の専門機関で

す。現在の加盟国は一九四ヶ国であり、日本は1951年5月に加盟しています。6つの事務局に分かれており、日本・フィリピンは西太平洋事務局に分類されています。WHO西太平洋事務局はWPROと略されます。

手入れの行き届いた庭園が取り巻く中に、万国旗が飾られ、いかにも国連機関というような莊厳な建物でした。許可証をつけ、門で荷物検査を受け入館しました。

### ブラウンバッグ・セッション

茶色の紙袋にサンドイッチ（ツナ味またはチキン味）と飲み物が入つており、これらを食しながらハンセン病回復者二名から治療前後の生活などの体験談をそれぞれ聞かせていただきました。ハンセン病発症の経緯や差別・偏見の中から自立する上で家族の協力、愛情が不可欠であつたこと、辛い過去を涙ながらに語られました。

現在は家族と共に幸せに過し、回復した後もハンセン病の支援活動にも参加しているとの内容でした。

日本からの研修参加者で駿河療養所の皮膚科医師で

ある四津先生から

「日本におけるハンセン病の過去・

現在について」の

講演がありました。

歴史を隔離政策以

前と隔離時代、予

防法廃止後の今日

までを説明。その

中で、予防廃止に

至る回復者の活動

や、熊本裁判での

勝利する姿が紹介

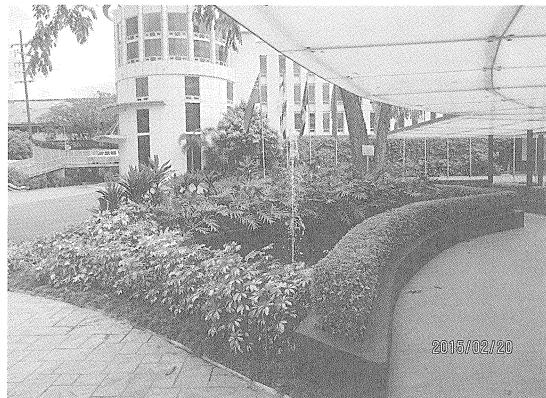
されました。全国十三療養所の紹介と千八百四十名が

療養し、その生活風景や、治療場面の紹介に加え、平

均年齢八十四歳である現状か～End-of-life care～

Quality of ‘being’ の必要性が語られました。

研修参加者他、W P R O 職員、外部からの聴衆希望者がフロアにあふれ返るほどで関心の高さが伺えました。四津先生はこの研修中、各施設の講義を和訳してくれ、この先生がいなければこの研修は成り立たない



WPRO

というほどの活躍ぶりでした。

現在W P R O 事務局長は韓国人のシン博士で、その次の次長が日本人の葛西医師でした。局長は投票で選ばれているのですが、日・韓での持ち回りのように交代交代だそうで、そうすると次期局長は葛西医師か？という話も伺いました。田中医師・錦織医師は前夜の懇親会にもお見えになり、日本のエリート中のエリーとお食事をするめつたにない機会となりました。

W P R O の活動は疾病制圧のための政策・指針の作成、現状調査、パンデミック対応計画の策定、対応力の底上げなどです。今後の優先的課題としてハンセン病を含めた、公衆衛生における指導的役割や公衆衛生的危機への対応や、母子保健の強化、保健システムの向上であると述べられておりました。世界におけるハンセン病新規患者の動向としましては、増加国はインド・ブラジルで、特にインドは驚異的に増加しており、治療が追い付かない状況とのことです。W P R O 地区ではミクロネシア連邦・マーシャル諸島共和国・キリバスが増加傾向にあるとのことでした。フィリピンは新規患者総数と有病率は高いですが、人口比率では発生が少ないそうです。今後の課題としては、ハンセン

病に対するサービスと専門性の維持、正確できめ細かい疫学データの収集と分析、患者・回復者の継続的ケアなどが必要と考えられていきました。継続的ケアには、正確かつ定期的な診断・評価、身体的・社会的リハビリ、薬物治療終了後も長期的なケアを提供する体制の維持が必要です。また現在においては革新的な技術・研究開発の欠如が問題となつており、例えば早期発見、早期診断の技術の開発や発病・障害を予防する技術の開発などが望まれるとの講義内容でした。

### 研修の余談

普段過剰かとも思える日本のきれい好き文化と整つたインフラに慣れている私たちには、飲めない水道水・拭いた紙を流せないトイレ・汲み水で流す便座のないトイレ・食事前のお手拭きがない・お湯の出ないシャワー・知り合つて間もない研修参加者とのダブルベッドでの就寝による不眠と翌日の船酔い・効きすぎるエアコン・排気ガスの多さなど厳しい環境も多々ありました。しかし研修の合間に見える風景・自然に和まされてつつがなく終えることができました。日本との政策の違いを学んだこと、フィリピン国内で同じ政

策であるにも関わらず、差別・偏見があまりなく社会に溶け込んで生活できていたセブ島、閉鎖的限局された環境でハンセン病を受け入れ・受け入れられて生活していたクリオൺ島、首都であるがゆえ多種多様な人種が多いためか、今でも差別・偏見が根強いマニラ市と、三種三様の施設を訪問でき、とても要所要所をコンパクトにまとめていた研修だつたと思います。日本では後遺症に悩まされている元患者さんの療養所として当園はじめ十三のハンセン病施設ですが、今後人種の多様化が進めば新規患者の発症もあるのではないかといわれているそうです。日本では過去・フィリピンでは現在のハンセン病を学びにいつたつもりでしたが、もしかすると日本でも過去ではなくなるのかもしない。そう考えると今後日本ではハンセン病のスペシャリストの育成のためにも、このような研修が継続的に行われる必要があるのではないかと思います。

## どうぞよろしくお願ひします

昨年六月から当園で働いている四名の方々を紹介します。（アイウエオ順です）



猪股 真紀 (いのまた まさき)  
①中央センター1階 看護助手

### ①勤務場所

- ②あなたが大事にしている事（物）は何ですか？  
③一言挨拶

- ②家族  
③一日でも早く入所者の皆様の名前を覚え、よりよい生活を送つていただける様お役に立ちたいと思つております。

よろしくお願ひいたします。



伊藤 百恵 (いとう ももえ)  
①病棟 看護師



佐藤 紘美 (さとう えみ)  
①病棟 看護師

### ②子供と一緒にいる時間

- ③8月より病棟にて勤務させていただいております。

### ③入所者の方が安心かつ快適に生活ができるよう看護していきたいと思います。宜しくお願ひいたします。

### ②家族と旅行

- ③8月より病棟にて勤務させていただいております。  
②家族と旅行  
③病棟に配属になりました佐藤繪美です。皆様のお役に立てるよう頑張りますので、どうぞよろしくお願ひします。

人事異動



山本 毅(やまもと たけし)

①福祉室 作業手

②特にありません。

③8月から作業手になりました山本です。

私が普段から心がけている事は、職場の仲間と互いに協力し合い協調性を持つことです。

これからも一生懸命頑張ります。よろしくお願ひ致します。

【退職】（平成27年9月30日付）  
看護師長 伊藤 悅子  
看護助手 佐藤 栄子

【転入】（平成27年10月1日付）  
看護師長 上野 恵美（弘前病院より昇任）

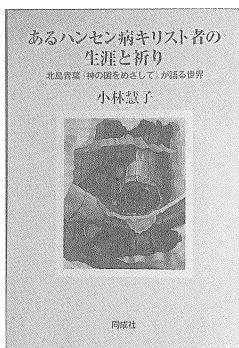
【採用】（平成27年10月1日付）  
看護師 佐藤 紗美  
看護助手 井筒 佐都（賃金職員より）

【退職】（平成27年12月31日付）  
看護助手 田澤 伸子  
" 小笠原留美子

## 「あるハンセン病キリスト者の生涯と祈り」

北島青葉『神の国をめざして』が語る世界

小林慧子著



七十六年の生涯のうち、その半世紀以上をハンセン病療養所で暮らした熊谷久一（北島青葉）。昭和五年に二十二歳で北部保養院に入所。創刊されたばかりの甲田の裾へ、様々な筆名で投稿を続けていました。北島青葉、ヒサイチ、久子。。。初期の頃は、故郷北海道への望郷の念を捨てきれず、活字にすることでの自らの思いを断ち切るように書き続けました。退所、再入所、転所、再入所を繰り返すうちに視力を失いましたが書くことは止めませんでした。

今号十頁よりの滝田十和男「一木一草」で紹介して

おりますが、札幌の小林慧子さんが「あるハンセン病キリスト者の生涯と祈り」と題して、北島青葉（熊谷

久一）の作品を軸とした本を上梓されました。熊谷の甥である後藤誠一さんが、見知らぬ叔父が居た新城村字平山十九の住所が国賠訴訟事件で見た松丘保養園の住所だと記憶していたこと。後藤さんの姉がハンセン病を勉強していた著者小林さんと友人であったこと。小林さんと親交のある松丘保養園入園者・滝田十和男が入所時の少年舎の舎長は熊谷久一であつたことが、次から次へと糸が繋がり、熊谷久一は甲田の裾に数々の文芸作品を残していくことが判明します。

小林さんは、後藤さんとともにその作品を掘り起こし、キリスト教信者であつた彼の作品を通して、ハンセン病者と文学を繙き、一冊の本として蘇らせました。熊谷久一の作品のみならず、甲田の裾の生い立ち、松丘保養園の歴史、ハンセン病の変遷なども含まれて、ハンセン病に関わる方、キリスト教関係者にも、是非一読して頂きたい本です。

甲田の裾85周年に当たり、甲田の裾にも掲載された熊谷久一の一文を引用します。  
(編集・石田)

「真実の精神生活へ」

青葉生

紅葉の秋！御下賜記念の十一月！私の心は悦びに躍る。嬉しさの余りつひ下手なペンを取つた。我等の雑

誌甲田の裾も新しい第三年目を迎へた。甲田の裾誌は大きい意味では我等らしい者が全世界に呼びかける声なんだ。然し甲田の裾誌は何を叫んだか？遠慮なく言ふならば病気になつて苦しかつたまるで病苦の歴史そのものだつた。返らぬ昔の繰り言だつた。だがもうそんな時代じゃない。とは云へ此の自分も同じ苦しい道を辿つて来たのだ。その苦痛の大小は知らぬが然し自身も相当な苦しみの道を通されて來た。だが何時までも泣いているべき時代ではない。我等の雑誌甲田の裾を通して我等の心的生活全部を活社会に吐露せしめよ。甲田の裾は電線であり我等の院は発電所もあるのだ。——後略——

(甲田の裾一九三二年十一月掲載)

※一〇一五年十一月 株同成社より発刊

定価一、九〇〇円十税

※全国の書店にて発売中

常々語つていた。入所者と社会との交流の窓口を閉ざしてはならないとの思いからである。

昭和五年の春、殺伐とした隔離生活の中での娯楽は囲碁、将棋、演劇といった室内娛樂、図書と言えば數冊しかない寂しさであつた。そんな中、睦会（現在の自治会）が「なぞなぞ、物は付け」などを募集し、優秀作に僅かばかりの賞金が出たことが、眠つていた思考力を呼び起こし、次第に短文芸などの創作者が誕生するようになつたのである。それをきっかけに園外の選者との交流も深まり、処女詩「落葉」が発刊された。しかし、「落葉」という誌名に病氣に罹患して絶望の淵にいる者に對しての配慮が無いということで、2号で廃刊になつたのである。それでも文芸に對する情熱の炎は消えることなく、十二月に誌名を「甲田の裾」と改め世に送り出された。戦争により休刊を余儀なくされるまでの十四年間一号の欠刊もなく発行され続けた。園内機関誌と云えども、検閲を受けることもあり、糾余曲折を経て、今般85周年という輝かしい歴史を刻むことが出来た。これもひとえに寄稿下さる方々は勿論のこと、園関係者皆様のご尽力の賜物である。今後ともよりよい機関誌とすべく精進してまいりますので宜しくお願いいたします。

(佐藤 勝)

## 編集後記

甲田の裾85周年に当たり、福西名誉園長へ原稿依頼をしたところ快諾して頂いた。福西先生が松丘で勤務された二十年間に機関誌甲田の裾の重要性を

# 自治会日誌

○印

自治会

## 八月中

会長が園内を案内した

### 8日○第23回執行委員会

○次期執行委員組織会

### 3日○8／1付採用職員1名 挨拶に來訪

### 6日○県の招待により青森ねぶた祭を観覧

### 7日○第21回執行委員会

### ○倫理に関する説明会

### 17日○8／17付採用職員1名 挨拶に來訪

### ○地区連絡係定例集会

### 21日 歌つこ広場

### 28日○甲田の裾編集局企画運営会議

## 九月中

### 2日○自治会選挙管理委員会開催

### ○四天王寺大学 和田謙一郎教授・田原範子教授、

### 長崎大学 平田勝政教授來訪

### 3日○自治会選挙 立候補受付

### ○保健科運営委員会

### 4日 歌つこ広場

### ○第22回執行委員会

### 5日○自治会選挙 投票並びに開票

### 7日○新城小学校2年生4名と野沢教頭先生來園、石川

### 30日 職場環境清掃

## 12日○秋田県主催「平成27年度ハンセン病問題に対する理解を深めるための講演会」で石川会長が講演

○宗教施設及び弥廣神社例祭についての説明会

○次期執行委員組織会

### 10日○松風塾高校2年生によるマンドリンオーケストラ演奏会

○地区連絡係定例集会

○施設整備委員会に石川会長出席

### 14日○地区連絡係定例集会

○施設整備委員会に石川会長出席

○地区連絡係定例集会

○施設整備委員会に石川会長出席

### 16日○施設整備委員会に石川会長出席

○施設整備委員会に石川会長出席

### 18日○平成27年度敬老会

○施設整備委員会に石川会長出席

### 24日○倫理委員会に石川会長出席

○厚労省健康局疾病対策課 田原課長、原渕補佐来

が質問に答えた

○青森大学社会学部学生と藤林教授来園、石川会長

### 25日○第24回執行委員会

○新城小学校3年生3名と父兄1名来園、石川会長

が質問に答えた

○青森大学社会学部学生と藤林教授来園、石川会長

30日○弘前大学医学部学生来園、石川会長が講演

### 十月中

1日○10／1付採用、転入職員3名 挨拶に來訪

〃 ○真宗大谷派奥羽教務所 篠岡所長、外2名挨拶に來訪

2日○第1回執行委員会

〃 ○施設整備委員会に石川会長出席

8日 ご遺骨・ご遺灰にかかる納骨式

〃 高知県慰問

〃 北海道はまなすの里慰問

〃 ○施設整備委員会に石川会長出席

14日○平成28年度医療改善・予算獲得統一行動の為、石

川会長出張（～17日帰園）

15日○新城小学校1年生51名が校外学習で来園、園内を

散策し栗拾いを体験した

16日 国立ハンセン病療養所施設長連絡会議

〃 さくら保育園との合同収穫祭

〃 ○第19回秋季親善交流ゲートボール大会

19日○国立ハンセン病資料館 田代学芸員が聞き取り調査の為來訪（～23日）

〃 ○地区連絡係定例集会

22日○消防訓練  
23日○第2回執行委員会

26日○青森県映画センター 大塚幸氏來訪

〃 ○秋田県赤十字芸能奉仕団慰問

27日○第1・2四半期自治会会計業務監査（～28日）

29日○横手市結核予防婦人会慰問  
30日 歌っこ広場

### 十一月中

2日○平成27年度物故者慰靈祭

5日○助双仁会厚生病院附属看護専門学校3年生22名

施設見学のため来園、石川会長が講演

6日 広島県慰問

〃 ○第3回執行委員会

10日○倫理委員会に石川会長出席

12日○女 九十一歳逝去 秋田県出身

〃 ○保健科運営委員会

17日○男 九十三歳逝去 青森県出身

20日○大館地区結核予防婦人会慰問

25日○第4回執行委員会

26日○平成27年度除雪計画打ち合わせ  
27日 歌っこ広場

# 園内の出来事

平成27年度敬老会 9月17日



安倍総理よりの「お祝い状」を川西園長より受けとる百歳の桜庭清一さん



「昭和ナース」による余興  
「恋するフォーチュンクッキー」

新城小学校1年生校外学習 10月15日



入所者宅の庭で花の摘み取り、栗広場で栗拾いの後、お礼の歌を披露。その可愛らしいしぐさ、歌声におじいちゃん、おばあちゃんはメロメロでした。

平成27年度物故者慰靈祭 11月2日



祭詞を読み上げる川西園長



来賓・入園者・職員による献花

## 国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で106年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九番地

園長 川西健登

保有敷地

二三〇、五四八平方米  
(六九、八六三坪)

建て面積

三〇、三五八平方米  
(九、一九九坪)

延べ面積

三六、〇三六平方米  
(一〇、九二〇坪)

## 交通案内

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車  
(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車  
(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石  
行き 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より (車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより (車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三

内靈園 (1km) と国の特別史蹟指  
定の三内丸山繩文遺跡や県立美術  
館 (2km) 等があります。

発行所

一般財団法人 松丘保養園慰安会

所在地

〒〇三八一〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話 (017) (788) 〇一四五・〇一四六

発行人 川西健登

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町一丁目十一―十六

青森オフセット印刷株式会社

電話 (017) (775) 一四三一一番